法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

環境問題の哲学

Adachihara, Toru / 足立原, 貫

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
31
(終了ページ / End Page)
44
(発行年 / Year)
2010-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008020

Hosei University Repository

環境問題の哲学

足立原　貫

まえがき

法政哲学会第29回大会において標記の課題による特別講演の機会を与えられ、その講演内容の概要を本誌に寄稿する責を負った。

半世紀余にわたって〈農学徒〉の道を歩み、「農林業」にかかわる社会活動の現場に身を置き続けてきた者が、〈哲学徒〉の道を歩んでこられた方々に向けて「哲学」を付した演題で話をすることとなった経緯に触れずには寄稿の責を果たし難い。

しかし、その記述だけで許容される紙数をはるかに超えてしまう。そこで私事の一片を冒頭に添え、本稿を書き進める。

○　私は大学の教養課程（理科）に入学後ほどなく、極めて私的な事情で山崎正一先生の門をたたいた。先生は門外漢の私を育ててくださり、私の活動を『文明批評の実践』、私が書く小稿を「書斎の閑文字ではない。首尾一貫した足立原哲学が展開されている」と評価くださった。

○　富山県下の廃村を拠点に私が若い仲間たちと実践を開始したとき、山崎先生は「ぼくの哲学を実生活にうつすと、足立原君の生き方になるのだな」とおっしゃった。

○　私たちの活動が三〇周年を迎えた一九九七年八月に山崎先生は逝かれた。

Hosei University Repository

それから一三年後。

山崎先生に背中を押される思いで、私は、法政哲学会の講壇に立った。

本稿は〈環境〉が問題にされる時代と社会にあって、傍観者ではいられず、行動を起こさずにはいられない者が、どのような思いで、どのように問題をとらえ、どう考えて行動してきたのか、実践の原体験を基底に据えて論述しておこうとするものである。

一　〈環境〉が日用語になった時代

私たちが置かれている状況を考察するとき〈歴史―社会〉〈政治―経済〉という基軸や側面を設定し、それらの形態や構造や動向の中で問題がとらえられてきた。しかし、人類世界の同時代現象として、巨大な科学技術力に支えられた〈工業化・都市化〉を主流とする現代文明の潮流の渦中では、人類が生き続けようとする営為をめぐって続発してくる諸問題に対処するため、これまでとは異なる別の基軸や側面の設定が求められている。〈人工―自然〉〈生物―環境〉である。

本来、〈歴史―社会〉という軸からであれ、〈政治―経済〉という面からであれ、現実の日常を生きる者の視点と認識では、人類の存在は生物としての〈生存〉であり、営為は生物としての〈生き続ける努力〉を内容とするものである。

さまざまな工業活動・都市生活による環境汚染・自然破壊が進行し、地球規模での気候大変動も懸念され、人類が生き続けるための営為が困難になってきつつあるだけではなく、生存まで脅かされるような事態が到来するのではないかという危機感さえ抱かれる今日的状況下、私たちは共に生き続ける営為に必須の生存条件確保のため〈環境〉を問題としてとりあげねばならなくなった。

記憶をたどると、私が「環境」という単語に初めて接したのは、一九四〇年代はじめ、小学生から中学生になるころであったろうか。学校の授業でダーウィンと進化論についての話を聞いた。

そのとき生物学に関する特別の専門的な用語と思えるように刷り込まれた「環境」という単語が、いまや、小学生まで口にするほど社会で広く普通に使われるようになり「環境問題」が日常会話にまで出てくる時代となった。

二　「環境問題」へのめざめ

Hosei University Repository

日本において大衆レベルまで「環境問題」が意識され始めたのは一九七〇年代に入ったあたりからであるが、前史に〈公害〉をめぐる〈騒動〉がある。

日本の〈公害〉は、一九〇〇年（明治三三年）二月、被害を訴え出ようとする村民たちが官憲に抑圧されて表面化した栃木県・足尾銅山の〈鉱毒〉に始まったとされる。

当時、欧米列強を追う急速な工業化・都市化を内容とする近代化路線をひた走り始めていた日本では、大小類似の事件が他の地域でも少なからず出現していたのではないかと推測されるが、やがて〈戦争の時代〉に突入し、国策の陰でさまざまな公害があっても、加害企業側が責められるような社会問題化することはなく、被害住民側が時代の濁流に押し流されて水没するかのように終わっていたとみられる。

出現した「公害」が白日のもとに社会問題化し「公害問題」とされるようになったのは、足尾銅山の鉱毒事件以後半世紀以上の年月を経てからのこととなる。

第二次世界大戦の終結後、日本は敗戦による窮乏から脱して復興を果たすと、一途に経済成長を求め続け工業化・都市化の推進で、もてあます過剰なほどの豊富な消費物資と、ボタンやスイッチやハンドル操作によって得られる生活の便利さを得た。

この文明路線が、手放しで喜べないと人々に気づかれるきっかけとなったのは一九六〇年代に噴出した一連の公害事件をめぐる公害騒動であろう。

工場周辺の騒音・振動・悪臭・地盤沈下などから地域の河川や大気の汚染等々、多様化しつつ続発する公害は局地的なものから広域化するとともに深刻化し「公害デパート日本列島」「公害先進国日本」など「経済大国」の裏の汚名を着せられるほどであった。

一九六七年制定の公害対策基本法で〈公害〉が定義され四大公害と言われる〈三重の四日市喘息〉〈富山のイタイイタイ病〉〈熊本の水俣病〉〈新潟の水俣病〉の訴訟が一九六七年から六九年までに相次いで起こされた。

その間それらの報道に呼応するかのように海外からレイチェル・カーソン著『沈黙の春』やローマ・クラブ「人類の危機」レポート『成長の限界』が入ってきて話題となり始めた。

一九七〇年代になると都市部における排気ガスや光化学スモッグなどの事件や農山漁村部における農薬害事件の報道が飛び交うところへ、有吉佐和子の連載『複合汚染』が七四年一〇月から朝日新聞で始まった。

それらが追い風となって「公害」に対する社会問題意識

Hosei University Repository

は一気に高まり、広く大衆に、自然界の生態系まで視野に入れた〈環境問題意識〉をめざめさせることとなった。

「複合汚染」が流行語化するような世情の中で〈環境〉をめぐるさまざまな〈声〉が社会の各界各層で起こり〈環境問題論議〉が関心を集めた。しかし当然のことながら〈環境問題論議〉は、都市生活を享受してきた住民側で大きく、論議の向かうところは、環境汚染のメカニズムの解明や、環境破壊の〈犯人さがし〉や、責任追求のための告発などを煽動することはあっても「では、どうしたらよいのか」ということになると無力だった。

一九七〇年代の中葉に至ってそのことが大衆レベルで気づかれるようになると、環境問題に向き合う人たちによる実践活動が始まり、一九八〇年代にかけて盛んになっていった。「草の根運動」と総称されている住民運動である。

婦人たち、子供たち、老人たち、青壮年たちさまざまな世代の人たちが、ゴミ処理や廃棄物リサイクルのような身近なことから、野生動植物の保護・エネルギー節約・農薬や化学肥料の使用減、ときには開発事業阻止といった地域社会を揺るがす強大な住民運動の芽になったようなことに至るまで、「草の根運動」は活動の主体も、活動の内容も規模も展開もさまざまな、大衆レベルでの内発的な実践活動である。

草の根運動に共通しているのは、「環境問題」にめざめるとともに「自分たちで出来ることを何かしなければ」という思いにかられた人たちが、時流にのるような〈環境問題論議〉で終わらせず、行動を起こし、実践によって問題意識を確かなものにしていったことである。

すでに、栃木県・足尾銅山の鉱毒事件の場合がそうであったように、〈環境問題〉をめぐる大衆行動は、〝権力〟に向かっての〈反対運動〉の模様を呈して表面化する。

一九六〇年代から七〇年代にかけて、〈反戦〉〈反核〉を叫び、〈反権力〉〈反体制〉を標榜する学生運動を主柱に若者たちの反乱が米・欧・日で激発したが、その動向と、〈環境問題〉をめぐる大衆運動の高揚は深くつながっていた、と見られるところに、もともと〈環境問題〉が内包する〈問題〉の〝資質〟に根ざす「課題」がある。

課題の要素は三点。

①先行する〈事件〉。②事件を問題とした側の素朴な疑問に根ざす〝正論〟。③〝正論〟がカタチにする事件解決。

〝あの時代の〟若者たちのさまざまな反対運動の多くは

Hosei University Repository

〈鎮圧〉されて終わってしまったが、一つの〈事件〉をとらえた「反対運動」として始まりながらも、他の反対運動の場合とは異なる展開をしたのが「草刈り十字軍運動」である。一九七四年夏に富山県下の廃村で始まり、いまなお毎夏継続している。

三　「草刈り十字軍運動」の場合

問い返すまでもなく〈廃村〉は〈人〉がいなくなったから〈廃村〉であり、何か異変が起こってもそこに〈人〉がいなければ〈事件〉にならず、たまたま〈人〉がいても、その〈人〉がその異変を「事件だ」としなければ〈事件〉とならず、〈運動〉はコトをおこす〈人〉がいなければ始まらない。

その〈廃村〉は富山県上新川郡大山町小原（現在、富山市小原）。数百年前に開かれた落人集落と言われる。富山地方鉄道岩峅寺線の上滝駅から南々東へ熊野川沿いに約一三㎞さかのぼったところ。標高約五五〇m、冬季三m余りの雪に埋もれるきびしい自然の中で、人々は代々一九戸の戸数を守って暮らしてきた。しかし激変する時代の潮流がこの地に及ぶと、一戸、また一戸、と〈挙家離村〉してゆき、一九六四年（昭和三九年）晩秋、東京オリンピック景気に沸いた都市の灯に吸い寄せられるように最後の三戸も離村。小原から人々の暮らしの灯は消え、廃村となった。

それからちょうど一〇年後の一九七四年（昭和四九年）夏、この廃村・小原に〈事件〉が発生し〈草刈り十字軍運動〉が起こった。そのとき、廃村・小原に〈人〉がいた。私たちがいたのである。

その七年前の一九六七年（昭和四二年）早春、「どうなるのだろう」の見通し論議を捨て「かくあるべきだ、そうしよう」「いつか誰かがやらなければならないことなら、いま俺がやろう」という若気満々〈実践する者の信条と情熱〉だけを支えに、私は若い仲間たちと残雪を踏みながら小原への道を登った。「農業開発技術者協会」という気負った名の任意集団を結成し、自分たちの思いを形に移す活動を開始するためであった。

世襲と生業の性格が濃いこれまでの〈農家農民型農業〉の〝やらされる意識と体制〟から脱皮し、社会における〈農〉の機能の一端を担い続けていこうという〝やる者〟たちによる開かれた営農体の確立をねらい、その実現をはかる実践の場を〈廃村〉に求めたのである。

これまでの常識や手法に基づく思考や施策のワクにとらわれない〝やる者〟の活動拠点として〈一つの社会〉〈一つ

Hosei University Repository

の文化〉〈一つの価値〉が死んだ〈廃村〉は、さまざまな可能性の〈宝庫〉とすら思えた。私たちはその〈宝庫〉から次々と新たな構想を引き出しては、また新たな実践の道をひらき、田畑を耕作しながら土と直結した生存条件と生活価値の探求をめざす「人と土の大学」の開講など、一般の営農活動のワクを超えて事業を展開していった。

この私たちにとっての活動の拠点であり宝庫である小原に、突如、降りかかってきた災難といえる〈事件〉が発生した。一九七四年（昭和四九年）五月二三日昼のことである。

小原の畑の一隅に、いきなり杭が打ちこまれ、大山町役場の名による告示板が立てられた。「告示」は、大要、次のような内容のものであった。

「来る五月三〇日午前五時～正午、造林地に除草剤の空中散布を実施する。薬剤は大量で広範囲に及ぶため、被害が出ることも予想されるから、薬剤散布中ならびに、その後一ヶ月間の入山を禁止する。」

添付地図に示されていた散布対象区域は、私たちの活動拠点の裏山一帯に当たる。

まことにひどいハナシというほかはない。一〇年前に〈廃村〉となった土地とはいえ、七年前から私たち農業開発技術者協会がその地で活動していて、そのことは富山県内だけではなく全国にも報道されていた。そこへ一ヶ月間も立ち入り禁止をしなければならない危険な薬剤を空中から広範囲に散布するというのである。そこで生活し仕事をしている私たちに、事前の了解どころか一片の予告すらもなかった。

突然立てられた「告示」で私たちの生活はもとより、生存も脅かされる一大事件であった。私たちは直ちに抗議行動を開始した。告示板を立てた大山町役場と、除草剤散布の実施主体である森林開発公団富山出張所へ抗議し、散布中止を申し入れた。

こういう類の抗議や申し入れが、すんなりと受け入れられるものではない。激しい論争になり、論争は、薬剤（クサトールFP粒剤）の安全性問題から自然生態系の保全問題へと焦点を移しつつエスカレートしていった。その過程で、この散布計画が、富山県下四ヵ町三〇〇haの造林地にわたっていることを知った私たちは、「住民エゴ」のそしりをはねのけるためにも、小原だけでなく、県下いずれの地区の除草剤散布もすべて阻止しようという猛反対運動を展開することとなった。

メディアの報道支援もあってか、県の行政介入で空中散

Hosei University Repository

布は一ヵ月間延期されたが、あくまでも延期であって中止ではない。いつ強行されるかも知れない。問題は〈反対〉だけで解決することではない。資源問題、国土保全問題を持ち出すまでもなく、「森林育成」は天下の大事である。その事業に不可欠な下草刈り作業をどうしたらよいのか、という〈対案〉がなければ、私たちの〈反対運動〉は森林育成事業に無頼な妨害を働いただけという結果になりかねない。しかも、反対していたことが強行された場合の空しさを考え合わせると、反対の意思表示だけの行動では、どんなに激しく盛り上げても先が見え過ぎていた。

〈反対運動〉というコトについて、学生時代からのさまざまな体験により、私には確固たる持論があった。

――反対するには「ではどうしたらよいのか」という〈対案〉を持たねばならない。しかし対案を持つだけではダメだ。対案を提示して相手にチエをかすことになっても、もともとそのチエがなかった相手は、提示されたその案を、どのように実践してよいのかもわかるまい。〈対案〉を提示するだけでなく、自らその案を実施してみせてやらねばならない。「チエをかしたらチカラもかしてやれ」なのだ。――

除草剤がなかった時代には人手で草を刈っていた。対立が硬直化した頃合いを見はからって、私は「夏休み中の学生たちを主力とする全国の若者たちの人手による下草刈り」という対案を提示した。

そのとき私の脳裏には、汚れた都会の空気の中でせっせと時間を売るようなアルバイトに汗を流す学生たちや、山麓にテントを張り重量物を背負い山の斜面を上下して足腰の鍛錬とチームワークを培う合宿をする学生たちの姿が浮かんでいた。こういう学生たちに、夏の山林とそこにおけるきびしい仕事を開放すれば、彼らの「クラブ強化合宿」と「経費獲得アルバイト」を両立させるだけではない。目標を立て難い〝現代の荒野〟を彷徨する若者たちに〈自己鍛錬〉〈自己啓発〉〈価値の創造〉の場と機会を提供し、結果として、森林業務の一端が達成されるとともに、代わるべき解決策の見通しも全く持たない多くの〈反対運動〉への問題提起ともなる。まさに一石数鳥のねらいを持つ可能性の夢多き着想による〈対案〉であった。

私の対案提示に相手は嘲笑した。「山林業務の現場を知らないインテリの理想主義で、山の下草刈りができるものか」「軟弱ないまどきの若者が、きびしい山林の重労働に耐えられるものか」「一ha刈るのに一日一〇人役として三〇

Hosei University Repository

〇haでは延三〇〇〇人が必要だ。どんなに苦しくても逃げない学生を、それだけの人数そろえられるのか」「三〇〇haの下草刈りをやれるものならやってみろ」というのであった。

ここで「できない」と言えば、〈反対運動〉はそれまでであったであろう。敵対する相手の困難な仕事をかって出て、肩代わりしてやらねばならない、という全く奇妙な結果になることではあっても、「そもそも、あんた方の仕事ではないか」と切口上で言いまくっては何の効果もないし何の意味もない。「できない」、というのを取り繕うだけの強弁であれば、それみたことかとばかり、明日にでも空中散布のヘリコプターが飛んできそうな状況である。

まさに「チエをかしたらチカラもかしてやれ」の正念場であった。

「下草刈りに参加してくれる若者たちは私が集めましょう」と言い切った私は全国各地に点在する同志たちに連絡をとるとともに、作業着のまま下草刈り用の長柄の大鎌を持って上京し、大学の寮や街々の学生たちの溜り場を歩き回っては〈事件〉を訴え〈運動〉への参加を呼びかけるとともに、本郷の学士会館分館で昼夜二回の説明会を開催した。この説明会を企画し世話してくれた東京の同志たちは、自分たちの職場の業務に支障をきたしながらも事務所を開放し、結集してくる若者たちの受け入れ窓口役をかって出てくれた。『草刈り十字軍』という名称は、その同志たちの発案によって、当時の若者たちに人気のあった「ザ・フォーク・クルセダーズ」にヒントを得てつけられた。

町役場や森林組合の嘲笑を吹きとばすように、チーム参加の第一陣（山形大）、第二陣（玉川大）、第三陣（同志社大）につづいて個人参加の若者たちが全国各地から続々と富山へやってきた。大学生・高校生・予備校生・会社員・公務員・自由業者・ヒッピー等々、当時の世相を映して、立場も思想も平素の生活もさまざまな〈若者たち〉は三〇〇人近くにのぼり、脱落者はあったものの、所定の日数の激務に耐え抜いた。

低質のやすい労働者を掻き集めたくらいの認識しか持たなかった無理解な大人たちによる中傷や、悪質とも言える無責任な報道や筋違いの論評に攪乱されることもなく、私たちは自ら起こしたコトの責務を遂行した。告示板が立てられてから一一二日目、草刈り開始から五七日目であった。

参加の動機も〈運動〉にかける思いも異なり、平素、共同作業をしたこともないような若者たちが、質素な食事と不便な宿舎で起居を共にし、ハチに刺され、ウルシにかぶ

Hosei University Repository

れ、日射病に倒れるかも知れない過酷な場に身を置き力を寄せ合い、励まし合い、助け合って汗を流した。その現場の様相は「異なる者が異なったまま共存し、目標に向かって協力し合える」ことを身近に感得させてくれるとともに、この時代と社会が直面する問題を見る目を開かせてくれた。

壮烈な戦いだったと回想される運動の発端から世紀を越えて三六年、毎夏、富山県下の造林地に全国から、ときには外国からの参加者たちも加わり、年齢の巾も五〇歳代・六〇歳代・七〇歳代までにも広がって運動は継続。全国各地で日常的とも言えるように展開されている〈森林ボランティア〉や各種の〈環境問題に取り組む住民運動〉の〈さきがけ〉となったと評価されてはいるものの、運動を推進している当事者としては、環境問題をあらためて問い直し、運動の行方を見据えねばならなくなった。

四　「環境問題」を問い直す

「環境問題」をあらためて問い直すとは、一体どう問い直すのか、自問して思い至る。

コトに当たっての素朴な疑問を根元的に考える努力――コトを処するに際しての原型的発想を重視する姿勢――これまでに常識化されている思考方法やその思考法によって集積され体系化されている知識の権威にとらわれない心がまえ――そこに生起する思いを発言する勇気――

こうした私流の〝手続き〟によって「環境問題」の(イ)(ロ)(ハ)を寸描してみる。

(イ)「思いどおりにしよう」としてきた果てに

人類の歴史は、自分たちの生活と生存にかかわるヒトや他の生物やモノやコトを自分たちに都合のよいよう自由に操作しようとする歴史である。

本来、自分たちの思いどおりにはならない野生動物を家畜化し、必ずしも自分たちに都合のよいように成育したり繁殖したりするものではなかった野生植物を栽培植物化してきた。

自分たちの思いどおりにしようとする対象は、モノやコトをめぐってだけではない。ヒトをめぐってのこととなれば、他者の奴隷化。それが拡大された形と内容をもつ他集団、他民族、他国家を従属させようとする強者の支配。いずれも、自分あるいは自分の帰属集団以外の個人や集団を、自分たちの思いどおりにしようとする〈征服欲〉〈支配欲〉のなせるわざである。その対象がさらに広く自然界へと求められたところに「山を征服」「海を征服」あげくは「自然

Hosei University Repository

改良」「自然を支配」などの思想を生み、その思想にもとづく行為が継続し繰り返されてきた。そうして行きついたのが、生活環境・生存環境を丸ごと人々の思いどおり自由にしようとしてきた現代先進国文明ではないか。

思いどおりにならないモノやコトにぶつかると、いかにしてそれを越えるかの方法をさぐってチエをしぼり全力をあげる。そこに横たわっている原理・法則の体系を〈科学〉で明かし、手段の体系を〈技術〉と化す、それらの営為を「研究」「開発」「創造」してきた。根底にあるのは「できるかできないか、どうすればできるか」だけを内容とする〝ものの見方・考え方〟〟判断のものさし〟だけであった。そうした過程で、なお思いどおりにならないモノやコトにぶつかり、思いどおりにしてはいけないモノやコトがあることを気づかせられた機会はあったはずではあるが、〝進歩〟の名において、その機会を無視し、なお「思い通りにしよう」とする方途をさぐり、その道を歩んできている。歩みつづけて来た結果が、人類の生存基盤である地球規模での〈環境問題〉ではないか。

(ロ)「科学する」では取り組めない〈究極の課題〉

明日、明後日、来月、来年、破滅的状況になるという切迫感は抱いていなくても、いまや、〈環境問題〉は地球上に生き続けようとする全人類の問題になっている、ということが大衆レベルにまで〈知識〉としては刷り込まれている。

一九八〇年代中葉、〈二酸化炭素問題〉や、オゾンホールをめぐっての〈フロン問題〉等々、私たちの生活・生存にとって不都合な環境が人類世界全体に及んでいることは、環境問題を「科学する」ことで明らかにされてきた。

しかし、深刻化する〈地球規模の環境問題〉が国際規模で論議され、対策が講じられても、所詮〈対症療法〉に過ぎないことを思い知らされる。〈環境問題〉が意識されても、現象の認識や問題への対策が、自然科学の視点で認識し、対策を講じようとされているのに任されている限り、やがて直面しなければならない〈究極の課題〉に立ち向かうことはできない。換言すれば、環境問題は、「科学する」だけの知見に基づく〝正論〟の実践では、究極の課題の周辺を回遊し続けるだけに終わるであろう。

環境問題の発生は、人類が生き続けるための営為そのものに起因することが気づかれ始め、人類の世界人口は増加の一途をたどっているとわかってきたからには、環境問題の〈究極の課題〉は、私たちの生活様式・食料問題・人口問題を内包するものとなる。

行きつく先は、人々の生き方、生き続け方、長寿を手放

Hosei University Repository

しで喜べるのかということにまで及ぶ〈死生観〉の課題を包含する〝知の営み〟が不可欠となる。環境問題は〈科学する〉ことを脱して〈哲学する〉ことに踏みこまねばならないときがきているのである。

（八）見過ごされがちな〝元凶〟

〈環境問題〉を生じさせる〝元凶〟に、「成長」を誤解して暴走する「経済活動」と愚かな認識の「自然保護」がある。

「成長」とは本来、生物に見られる一つの現象の説明用語だったはずである。それが経済現象の説明に転用されたのであろうが、それはたいへんな〝まやかし〟になった。

「成長」するものであれば誕生したときがあり、生まれてきて成長するものはやがて成熟し、老化し、死ぬ。無限の成長なんてあり得ない。にもかかわらず、経済成長率の数字だけでしか経済現象を考えられなくなっていれば、景気、景気で、〝まやかし〟の様相は見えにくい。

「経済成長」とは何だったのか。「成長」という生命あるものの一つの現象を説明する用語を転用できるものではなく、経済の規模が拡大するということではないか。拡大しているのは〈膨張〉しているだけのこと。膨張であれば、度が過ぎたときパンクする。

物事は大きくなったり小さくなったり、伸びたり縮んだりするものだ。規模にも循環の思想が求められる。経済現象への対応には、拡大・縮小のチエとチカラの使いわけこそが重要なのだ。

相思相愛で互いにかばい合うという仲、あるいは、どんなひどい目に遭わされた相手をも恨まずやさしい気持で接し続けるという場合でない限り、やさしくしたりやさしくされたりする間柄が円満に成り立つのは、なんらかの優劣関係、あるいは強弱関係があってのことではないのか。そうなると「自然にやさしく」の心情で表現されたような「自然保護」はまことにあやしい。

「保護」は弱者に対する強者の側の論理であり、強者が弱者に施す行為なのだ。大人が子供を保護する。健康な者が病弱な者を保護する。大国が小国を保護する。この構図の行きつくところで「自然保護」などと大言する人類は、自然に対して強者たり得るのか？　あらためて問うまでもない。

私たち人類の側から、自然や地球に対して〝やさしく〟というのは、自然や地球と人類との関係についての認識が

Hosei University Repository

欠如しているまことに身のほどもわきまえない思い上がりというほかはあるまい。その思い上がりが増幅してのことであろう。「地球にやさしく」を口にする人々はまた「△△すると地球が壊れる」と言う。そこまで思い上がっているのか、恐竜が滅んでも地球は壊れやしなかった。人類が滅んでも地球は壊れやしまい。

環境の悪化は、人類が生存できる環境ではなくなる。地球は人類が生存できる〈星〉ではなくなる、という「人類の生存にとっての危機」であって、それを他人事のように「自然」や「地球」の危機にすりかえている。そのような愚かで卑劣な意識が〈環境問題〉の本質から目をそらさせ、〈環境問題論議〉ばかり花開いて、実践を伴う真剣な対応を怠らせているのではないか。

五　環境問題を哲学するために

現代文明を問い直し、新しい文明を構築するため、その土台固めを手がけねばならない。

科学技術の進歩発展と、その果実としての〈利〉と〈富〉に寄生しようとする〈経済活動〉。そこに、限りない拡大を求め続けねばならないような経済構造と、その構造内での経済行動でしか生き続けられないような人類が、これまで「進歩」と認識して構築してきた文明生活の様式をどういう生活様式に変えて、どういうような新人類に変身できるのか。

その入り口を探る思考の素材となりそうな〝小話〟を「あとがき」に代えて本稿を結ぶ。

一笑に付せない小話
――「あとがき」に代えて――

一九六〇年代中葉、アメリカの直接軍事介入で「ベトナム戦争」が激化していく。そのころ語られた小話がある。

――農村部の見回りに出ていたアメリカ軍将校が川のほとりでベトナム人の老農夫に出会う。老人は魚釣りをしている。将校は声をかけた。

「そんなに効率の悪いことを、よくもまあいやにならずにやってられるな」

「悪いことかね」

老人が応答し、二人の会話は進んでいく。

「舟を出して道具と機械を使ったらいい」

「それでいいことあるのか？」

「いっぺんに魚がたくさん獲れるさ」

「魚をいっぺんにたくさん獲ったって、わしも家族も、

Hosei University Repository

みんな食いきれないよ」
「自分たちで食わなくたっていいさ。獲った魚は、まちへ持っていって売ればいい」
「売る？　売ってどうなる」
「カネが入ってくるじゃないか」
「魚は食えるけどカネは食えねえよ。カネをどうする？」
「カネがあれば、もっともっといい舟や魚獲りの道具や機械が買える」
「それでいいことあるのか？」
「いい舟やいい道具や機械があれば、もっとたくさん魚が獲れる。たくさん獲ってたくさん売ればもっとたくさんカネが入る」
「それでまたもっといい道具や機械を買えるっていうのかね。いい舟や道具や機械を使って、たくさん魚を獲れば、またもっとたくさんカネが入るっていうのかね。そんなことのくり返しじゃつまらんね」
「いつまでも魚釣りをしていることはないじゃないか。カネさえあれば、なんでもできる。どんどんカネが入ったら、何でも好きなことをやったらいい。おいしい物を食べたり、着る物をきれいにしたり、いろんなところへ出かけたり、いろんな人に会ったり、いろんな物を見たり、いろんなことを聞いたり、知識をたくさん身につけて教養を高めるのさ」
「それでいいことあるのかね」
「教養を高めれば、いい職業につける。こんな魚釣りなんかしなくたっていいんだ」
「教養のない奴が魚釣りをやるのかね。教養を高めた人のいい職業って何だね？」
「自由にいろいろなことができる時間を、たくさん持っている職業さ」
「自由にできるいいことって何かね？」
「いろいろ、いくらでもある。ひとによって違うだろうけれど、本を読んだり、絵を描いたり、彫刻をしたり、写真を撮ったり、文章を書いたり、スポーツをやったり、自由な時間を使って自分がずっと興味を持ってやれることさ」
「そんなことに、ぜんぜん興味がなかったら、どうするんだ。興味があることだって飽きたら自由な時間はどうする？」
「えーいっ、いちいちしつこく、うるさいな、そうしたら川へ行って魚でも釣れ！」
「なぁーんだ、そんなことか、誰に言われんでも、いま、わしはやっとるよ」――
このハナシ、ばかばかしいと一笑に付せるだろうか。私

Hosei University Repository

は折りにふれては思い出す。とくに昨今の状況下、さまざまな問題に重ね合わせて思い出して考える。

アメリカ軍将校の発想や発言が〝まとも〟で、魚釣りをしていた老人の考え方や言い分は〝おかしい〟とされるのが現代文明社会での〝常識〟であろう。しかし、じっくり考えたい。「ベトナム戦争」という狂気の時代背景を考え合わせるまでもなく、たいへん示唆に富んだ〝小話〟だ。二〇世紀までに構築されて成熟し、この時代と社会に生きる人々へ深く刷り込まれ、今や腐熟してきた〝常識〟を根底から問い直す〈知の営み〉のためのよい素材ではないか。